



図書館だより

2017.11
No. 28

長崎県立大学佐世保校附属図書館

〒858-8580 佐世保市川下町123
TEL 0956-47-2191 (代表)
<http://sun.ac.jp/center/lib/sasebo/>

ブッククラブ The Folio Societyのこと

古河 幹夫
(副学長)

およそ20年前に本学から海外研修の機会をもらい、イギリスのケンブリッジに半年滞在した。そのときに知ったのだと思うが、Folio Society というブッククラブの会員になり、帰国後も定期的に案内が来るようになった。歴史、イギリス文学、美術、人物評伝、自然科学はもとより児童文学やユーモア小説まで提供している。しばらくして、これはイギリスの読書人・教養人を対象にしたブッククラブなのかと了解し、掲載されている書物はいわば教養人向け推薦書の目録でもあるのだらうと解釈した。

かなりの図書が日本語にも翻訳されており、読んでいなくても、それがどういうものかまづは理解できる。ところが、翻訳されていない図書で、しかもある程度関心のある領域の書物が紹介されていると、やはり注文して読みたくなる。注文はVISA カード等で可能なので、送料がプラスされることを承知すれば簡単に手に入る。The Folio Society が提供する書物は装丁がしっかりしており、しかも箱入りである。その後、かなりの同一タイトル書物がペンギンブックでも販売されていることがわかり、廉価に入手できるので注文する際には、ペンギンブックで出版されていないことを確認してからにするようになった。

結構多くの書物を購入したわけだが、とくに印象に残ったものを紹介したい。Sebastian Haffner, *The Meaning of Hitler*. Richard

Evans, *The Third Reich in Power*. ナチズムやヒトラーについては専門領域の経済・社会システム論に関連するものでもあり、強い関心をもって読んだ。前者は、自身が抱くドイツ民族・国家像に相応しくないのであれば、ドイツ民族は敗北後には存続するに値しないとヒトラーは思っていた、という分析をしており、驚きを禁じ得なかった。後者は、ナチ党のなかのヒトラーとは異なる潮流を克明に描き出しており、3巻の大部にもかかわらず、時間があれば読み直したいと思う書物である。

A.N.Wilsom, *The Victorians*. は、ヴィクトリア朝のイギリスを多面的に描いた書籍である。ちょうどNHKでBBCドラマの「女王ヴィクトリア」が放映され、それを機に開くにいたった書物である。夫のアルバートの描写などはドラマと併せて理解するとずいぶん脳裡に入るものである。Ian Mortimer, *The Time Traveller's Guide to Medieval England*. は14世紀イングランドを社会史として描いたもの。ヨーロッパ中世に関するものは日本語でも読める書籍は多数存在する。別に奇をてらって敢えて英書を開いたわけではない。同じ著者が近年 Vintage Books から『世界を変化させた十の世紀 (Human Race: 10 Centuries of Change on Earth)』という書籍をだしており、その語り口の巧みに惹かれて読んだ次第である。この2冊は私の専門領域と直接の関連があるというより、周辺領域というところであり、純粋な楽しみというより、大学教員としての研鑽の一部に含まれると解釈している。

Colin Renfrew, *Prehistory: The Making of the Human Mind*. も私自身は周辺領域に属する書籍と理解するものである。学問の世界で

は進化論が統一パラダイムとして影響力をもちつつあるが、社会的な価値観や道徳など精神世界も進化論の観点から捉えなおしが進行中である。認知心理学や児童心理学、動物行動学・心理学、脳科学等の拡大しつつある知見は大学教員にとってなれば必須知識となるだろう（たとえばドゥ・ヴァール『動物の賢さがわかるほど人間は賢いのか』紀伊国屋書店）。そのようなつもりで読んだわけだが、期せずして、「まちづくりとアート」に関して原稿を書く必要がでてきたとき、先史時代のヒトがどのような心性をもっており、3万

年前に制作されたと考えられる洞窟壁画をどのように解釈したらいいのか、参考資料として役立った。

膨大な書籍を職業意識抜きで読むことはない。この点からすれば、立派な装丁の書籍であろうが、中古本であろうがコピーであろうが、ほとんど大差ない。純粋な楽しみとして読書に浸るうえでは、The Folio Societyの書物のように手触りや紙質が与えてくれる要素も小さくはない。あと1年余でそのような境遇になるのかと、一抹の寂しさを覚えつつも茫漠とした期待を込めて想像するのである。

学生に勧めたい一冊
サイモン・シン著（青木薫訳）
『フェルマーの最終定理』
（新潮文庫、平成18年）

石田 和彦
（附属図書館長）

前号の図書館だよりでは、「幅広い分野の本を読もう」と題して、自分の専門分野だけでなく、広くいろいろな分野の本を読むことの大切さと面白さについて書かせて頂いた。今回は、そのような読書の一例として、少し古い本にはなるが、サイモン・シン著（青木薫訳）『フェルマーの最終定理』を紹介したい。

本書は、長年数学界で未解決の大問題の1つであった「フェルマーの最終定理」（数学では、証明されてこそ「定理」であるので、本来ならば「フェルマーの最終予想」とでも呼ばれるべきであった）が、英国人の数学者アンドリュー・ワイルズによって1994年10月に証明されるまでのプロセスを、ドキュメンタリー風に綴ったものである。

多くの場合、数学の定理というのは、専門外の者には、そもそも一体何が証明されて、それにどう意味があるのか、さっぱりわからないことが多い。例えば、佐世保校の多くの皆さんの専門である経済学では、その基本中

の基本である市場均衡の存在証明に「ブラウアーの不動点定理」というものが用いられる。この定理は「 S は R^n の非空、コンパクト、凸部分集合、 f は S から S への連続関数とすれば、 f は不動点を有する」（G・ドブリュー著、丸山徹訳、『価値の理論』より引用）ということ述べているが、相応の数学的予備知識がないと、この定理がそもそも何を主張しているのかわからないであろう。

こうした通例に反して、「フェルマーの最終定理」は、極めて平易で、誰にでもわかる。「 n が3以上の自然数の時、 $x^n+y^n=z^n$ を満たす自然数の組 (x, y, z) は存在しない」、それだけである。因みに、 $n=2$ の時には、 $x^2+y^2=z^2$ を満たす自然数の組は、 $(3, 4, 5)$ 、 $(5, 12, 13)$ などがある、これらは「ピタゴラス数」と呼ばれている（直角3角形の3辺の長さに関する「ピタゴラスの定理」として、中学生でも知っているであろう）。「ピタゴラス」数はこれら以外にも、無数に存在する。ところが、 n が3以上になると、事態は一変し、こうした自然数の組は1つも存在しない、と言うことを「フェルマーの最終定理」は言っているのである。

こうした平易な内容にもかかわらず、この定理は、17世紀のフランスの数学者であるフェルマーによって発見されて以来、多くの

数学者やアマチュアの数学愛好家の挑戦を悉く退けて、証明されないまま1994年に至っていたのである。フェルマー自身は、ディオファントスの『算術』という書物の余白にこの発見を記していて、そこには「私はこの命題の真に驚くべき証明をもっているが、余白が狭すぎるのでここに記すことはできない」（本書からの引用）と書かれているが、ワイルズによる証明がなされた現在では、このフェルマーの記述は、錯覚か「はったり」であったという見方が多いらしい。

そして、本書の主人公である数学者ワイルズも、10歳の時にこの定理に接し、「その問題はとても簡単そうなのに、歴史上の偉大な数学者たちが誰も解けなかったというのです。それは10歳の私にも理解できる問題でした。そのとき私は、絶対にこれを手放すまいと思ったのです。私は、この問題を解かなければならない」と思ったとのことである。そして、本書に描かれている、そこから、ワイルズが27歳で、10歳の時の決意を実現してこの定理を証明するに至るまでのストーリーは、まるで良質の小説を読んでいるかのように面白く興味深い。特に、1993年6月にワイルズが一度、「証明出来た」と発表し、その後その証明の一部に「欠陥」が発見されてから、約1年4か月後に完全な証明に至るまでの息詰まるような展開には、多くの読者が思わず引き込まれてしまうはずである。

本書の優れているところは、小説のように

面白く読みながら、同時に、「フェルマーの最終定理」の証明の概要や、それに関連する様々な現代数学の展開についても、読者を、何となく分かったような気にさせてくれることである。無論、途中には、楕円関数であるとか、モジュラー形式に関する「谷山=志村の予想」（実は、証明には、日本人数学者の業績も深くかかわっていたことに改めて驚き…）等々、多数の数学的な話が登場する。その技術的な詳細は、きちんとトレーニングを受けた専門家でなければ本当にはわからないはずである。しかし、取り敢えず、そのような些細なことは置いておき、証明の本質だけは理解できたような気分になれる。この辺は、著者のサイモン・シンのサイエンス・ライターとしての卓越した筆力によるものであろう。

なお、サイモン・シンには他にも、『暗号解説』（平成19年、新潮文庫）、『宇宙創成』（平成21年、同）等の著作があり、本書と同様に、数学や自然科学の難しい話を、引き込まれるような面白いストーリーとして読ませてくれる。特に、『暗号解説』は、題材自体は第2次世界大戦中にドイツ軍が用いた暗号の解説に関する話であるが、内容的には、現代のインターネット上での安全な通信に不可欠な暗号技術（最近流行の「ビットコイン」等の仮想通貨にも暗号技術が用いられており、仮想通貨は時に「暗号通貨」とも呼ばれる）にも通ずるものがあり、こちらも一読を薦めたい。



図書館で学ぼう

中村 貴治

（経営学科講師）

様々な人間が一堂に会し、交流しながら知的能力を養う大学において、最も知的な雰囲気には溢れている場といえば、図書館ではないだろうか。図書館には、書物がある「だけ」

である。しかし、教員・学生・地域住民の方々…あらゆる属性を問わず、ここに集まる人たちは皆、何らかの知的関心をもって集まり、各々が目的を果たすために好き勝手に知的営為を行っている。自由な学びの場として知的能力の涵養を旨とする大学において、これ程までに幸福な場所はないといっても過言ではあるまい。

私自身、学生時代を振り返ってもっとも

「学生らしい」時を過ごすことのできた場所は、図書館であった。所属するゼミナールの先輩・後輩とともに、毎週末に図書館で卓を囲み、好きに書物を手にとっては持ち込んで議論しながら勉強に打ち込んだ時間は、今でも忘れられない。そして、そのような濃厚な時間を共有してできた関係性は、卒業後もその他の仲間とは一味違う、いわば「一生共に学ぶ」ことができる仲間として続いているのである。

しかしながら、残念なことに現在図書館に行く機会がない、もしくは大学生でありながら悲しむべきことに本を読む習慣がないという学生が、万が一にもいるとしたら、本を強制的に読む習慣を身につけることも勧めたい。

例えば、私が学生の時に所属ゼミナール内で行われていたのが、「本の交換会」である。近年では、好きな本についてその魅力を決められた時間でプレゼンテーションして、評価し合う「ビブリオバトル」が注目されたが、「本の交換会」では決められたテーマについて選んだ本を2週に一度持ち寄って、本の紹介をし合っていた。

テーマは「企業・経営」・「宇宙」・「時代小説」・「哲学」など、さまざまであり、自分たちが好きに選んでよい。しかし、その紹介は自身の好き嫌いを超えて、「なぜそのテーマでこの本が良いと思ったのか」、「この本のどこに他の人が読んででもいいと思える魅力があるのか」といった、その本の本質に迫るような紹介を心掛けねばならないため、きちんと深く読み込むことが要求される。たまたま自分が好んだテーマであればまだ楽なのだが、自分の全く関心のなかったテーマであるとたった2週間で「良い本（しかも、もともとあまり関心がなかった分野の本）」を探さねばならず、なかなか苦慮させられた。

しかし、そのぶん得られたものも大きく、自分の好みに関わらずあらゆるジャンルの本の魅力に触れられたことは、私の財産となっている。例えば、手に取りやすいところでい

えば内田樹（2002）『寝ながら学べる構造主義』文藝春秋という本が、今でも私の研究室の本棚に並んでいる。

この本のタイトルにある「構造主義」というと、まるで非常に学術的で自分たちと縁遠い考え方と思われがちで、私も敬遠していたが、学友の紹介を受けて読み始めると、印象がまったく異なっていることには驚かされた。

難しいことが簡単な言葉で書いてある、というレベルではない。この本は、まえがきで「入門書が提供しうる最良の知的サービスとは、『答えることのできない問い』、『一般解のない問い』を示し、それを読者一人一人が、自分自身の問題として、自らの身に引き受け、ゆっくりと噛みしめることができるように差し出すこと」というように、私たちの物事のとらえ方や考え方の枠組み自体について、「なぜそのように考えられるのか？実はそれは特殊なことではないのか？」、ゆっくりと問いを投げかけ、日常生活では出会わないような問いの世界に私を連れ出してくれたのである。

普段の思考よりも一段上の世界で展開される議論は、大学生としてたまらない知的刺激を与えてくれた。

図書館では、学生の懐具合では手の届かない高価な専門書や、または実際に目にするまでは存在すら知らなかったであろう領域の書物に、気軽に触れることができる。最初は「小説」でも「SF」でも何でもいい。自分一人では本の世界を広げるのに自信がないという人は、是非、友人と一緒に予定を合わせ、本の魅力について試しに語り合ってみてほしい。

図書館とは、他の空間とは隔絶されて勉強に打ち込むことのできる稀有な場である。ここでは、教員も学生も地域の住民も、老若男女も関係なく、皆が平等に主役となって学んでいる。大学において最も大学らしいといえる場で、大学生らしい生活、大学生らしい人間関係を築き、末永い自分の財産にしてほしい。

新書のスズメⅡ

新川 本

(国際経営学科准教授)

6年前に図書館だよりの原稿を依頼され、何を書こうかと考えたときに、学生時代に手軽に読める本について取り上げようと「新書のスズメ」というタイトルで書かせていただいた。また、今回、原稿を依頼されて、新たに何を書こうかと考えたとき、6年前よりも学生が本を読んでいないのではないかという危機感を抱いた。前回もはじめから、難しい専門書を手に取って、「読め」というのは難しく、本を読む習慣のある学生でも、全く読まない学生でも、まずは手に取りやすい本として、新書を紹介した。

過去に『バカの壁』、『国家の品格』、『女性の品格』、『さおだけ屋はなぜ潰れないのか？ 身近な疑問からはじめる会計学』、『読書力』などの新書はベストセラーや話題になった書籍である。新書といっても、学生のみならずにはまだピンとこない方もいると思うが、岩波新書などの文庫より縦長の標準的な判型である173×105mmおよびそれに近い判型であり、書き下ろしを中心とする書籍である。

以下の内容は前回も紹介させていただいたが、各出版社の新書を刊行している目的である。岩波新書の刊行の目的は「現代人の現代的教養」であり、中公新書はその最大の目標として「真に知るに価する知識だけを選びだして提供すること」としている。また講談社現代新書は「もっぱら万人の魂に生ずる初発的かつ根本的な問題をとらえ、掘り起こし、手引きし、しかも最新の知識への展望を万人に確立させる書物」の提供を目的としている。このような新書の目的を見ても専門につながる教養を養うのに適した書籍群であるといえる。

学生時代は様々な知識、専門のみならず、

幅広い教養も養う必要があると考えている。そこで新書は1冊、200ページ前後で完結し、そのタイトルも幅広い分野を網羅し、比較的安価（1,000円以下）でほとんどの書店で手に入れることが出来る。専門書を手に入れるためには、一般書店では品揃えが少なく難しい。一方、最近ではAmazonなどを通して入手することは比較的容易になってはいるが、出版部数の関係で学生にとっては高額である点が課題である。もちろん、図書館には多くの専門書が蔵書されているが、多くの学生の希望する書籍をそろえることはできないのも現実である。

また、新書の魅力としてあげられるのは、基本的に書き下ろしという点である。すなわち、現在の経済や企業経営、社会問題、世界情勢から風俗、流行などを反映した書籍が出版されている。さらに様々な視点からの賛否を含めた内容のものが提供されている。同じテーマであっても賛否あるいは別の視点からの多面的な見方、解説を手軽に手に入れ、比較して読むことが出来る。学生時代に培ってほしい力として、多面的な見方することも、その一つであると考えている。物事の本質を理解するためには、様々な視点から検討することが必要である。新書を入り口として、さらに深く学んでいくために、関連する専門書を読み、背景にある理論や歴史などを理解してってもらいたい。

すでに今の学生にとって、情報はインターネットなどで手軽に手に入るものという認識があると思うが、本を読むことは、単に情報を手に入れるということだけではなく、読んでいる時間に思考し、自分なりの見方を醸成していくことにつながるといえる。

本を読むことに対して苦手意識を持っている学生もいると思うが、まずは興味を引くタイトル、内容の新書を手に取ることから始めてみてはどうだろうか。では最後に、2017年10月の紀伊國屋書店ウェブストアの新書

ベストテンをあげておくので、興味あるものがあれば、ぜひ手にとって読んでみて欲しい。『日本史の内幕－戦国女性の素顔から幕末・近代の謎まで』磯田道史 中公新書
『未来の年表－人口減少日本でこれから起きること』河合雅司 講談社現代新書
『孤独のすすめ－人生後半の生き方』五木寛之 中公新書ラクレ
『バカ論』ビートたけし 新潮新書
『逆襲される文明－日本人へ 4』

塩野七生 文春新書
『知ってはいけない－隠された日本支配の構造』矢部宏治 講談社現代新書
『ハーバード日本史教室』佐藤智恵 中公新書ラクレ
『定年後－50歳からの生き方、終わり方』楠木新 中公新書
『世界一美味しい煮卵の作り方』はらぺこグリズリー 光文社新書
『老いの僥倖』曾野綾子 幻冬舎新書

知の巨人(1) 司馬遼太郎

竹田津 進

(公共政策学科教授)

人それぞれに心の中に師事する知の巨人がいることと思います。知の巨人とは、エベレストのごとく聳え立つ、知識、知性、知恵の塊のような存在で、膨大な著作を残し、どの分野でも自由自在に語ることができる博学無比の人物、ということになるでしょうか。私にとって知の巨人とは、小説家の司馬遼太郎氏と英語学者の渡部昇一氏です。司馬氏は20年程前に、渡部氏も残念ながらこの春、鬼籍に入られました。

司馬氏は、『竜馬がゆく』や『国盗り物語』、『関ヶ原』『新史太閤記』など数々の歴史小説を書いた大小説家。氏の「二十一世紀に生きる君たちへ」は小学六年生の国語教科書のために書き下ろした随筆。NHKテレビの「英雄たちの選択」の司会者、磯田道史氏が『「司馬遼太郎」で学ぶ日本史』を書くほどの国民的作家と言えましょう。

実は司馬氏は私の出身校の大先輩。昔、大阪在住の司馬さんと近鉄電車で乗り合わせたことがありました。昼間の割合空いた車内で、素足に下駄を履き、ショルダーバッグを肩にかけ颯爽とした姿の司馬さん。1メートル程



先にたたずむ白髪の司馬さんとういうわけか、ほんの数秒ですが目が合いました。常人とは違う雰囲気、畏怖の念さえ覚えながら、その視線に温もりを感じた束の間の邂逅でした。

司馬さんは大学卒業後、産経新聞記者を経て、小説家に転身。その後多数の小説や随筆を執筆。司馬さんの小説はどれも傑作ばかりですが、私にとっての最高傑作は、『坂の上の雲』。数年前、NHKでテレビ化され好評を博しました。アメリカ留学中、サンノゼ市立図書館の書架で偶然見つけた全6巻を、日本語に飢渴した私は一週間ほどかけて読破。サンノゼはアメリカのIT産業の中心、シリコンバレーにある街で日本人駐在員も多く、もともとジャパントウンという日系人の町があったにせよ、この本との出遭いは単なる偶然だったのかと今でも思います。

この作品では、日露戦争、日本海海戦という、当時のロシアの南下政策と欧米列強の植民地主義から日本を防衛し、アジアやアフリカの植民地の国々に「独立」という希望の光を灯した、世界史的意義を持つ戦争が描かれています。司馬さんはしかし、決して戦争を美化したわけではありません。歴史小説を書き始めたその理由は、22歳で終戦を迎え、

焦土と化した祖国を目の当たりにしたとき、追込まれた戦争であったにせよ、なぜこんな無謀な戦争に突き進んだのかという思いからでした。

この小説に登場するのは、日本海海戦でバルチック艦隊を撃滅した東郷平八郎元帥と、「本日天気晴朗ナレドモ浪高シ」と後世に残る名文を残した知将、秋山真之。203高地を陥落させ、日露戦争を勝利に導いた将軍、児玉源太郎、乃木希典、大山巖など、維新の動乱を生き抜き、明治建国に命をかけた軍人たち。こういう明治の偉人に共通するのは、国の存亡の危機には、命を賭して立ち向かう、崇高なる自己犠牲の精神の持ち主であったことでしょう。

司馬さんの小説には、他にも、西郷や大久保を描いた『翔ぶが如く』、長州の吉田松陰や高杉晋作の『世に棲む日日』、沖田総司、近藤勇などの『新選組血風録』、シーボルトの娘イネと恋におち、戊辰戦争を勝利に導き、日本陸軍の生みの親となった村田蔵六（のちの大村益次郎）の『花神』（磯田氏によれば司馬作品の最高傑作とか）など、傑作ばかり

です。

司馬さんが知の巨人と言えるのは、随筆や思想的な著作も沢山書き残し、歴史や文化、宗教や文明についても縦横無尽に語っているからです。『司馬遼太郎が考えたこと』（全15巻）、『この国のかたち』（全6巻）、『街道を行く』（全43巻）やその他単行本は数え切れないほど。司馬作品は読んで面白いだけでなく、人生の知恵や知見が随所に。しかも司馬さんが偉いのは、難しい内容のことをわかりやすく平易な文章で書いていること。

「自分に厳しく、相手には優しく。それらを訓練することで、自己が確立されていくのである」「志を守り抜く工夫は、日常茶飯の自己規律にある」「事をなさんとすれば、智と勇と仁を蓄えねばならぬ」など司馬さんの言葉はまさに人生の至言であり、人に対する優しさを感じます。司馬作品を紐解けば、きっと新しい知の世界が開かれることでしょう。（次号「知の巨人（2）渡部昇一」。二十数年も前に、日系イギリス人作家カズオ・イシグロさんのノーベル文学賞受賞を予感していた人、その人こそ渡部昇一氏です。）



百聞先生のはなし

鶴指眞志

（実践経済学科講師）

「用事がなければどこへも行っただけいいと云うわけではない。なんにも用事がないけれど、汽車に乗って大阪へ行って来ようと思う。」これは内田百聞先生の有名な小説である『阿房列車』の始めにある一文である。交通経済論の世界でいえば、交通というのは何かをするために利用される派生需要であるのに対して、これは列車に乗ること自体を楽しむ、まさに本源的な需要である。そのような難しい話はここではやめることにする。さらにこの本を読んでいくと、お金を借りてまで、



しかも一等車に乗ってしまうことが書いてある。正直驚いてしまうが、そこまでして大好きな列車に乗るのは、鉄道ファンの鑑である。先生は筋金入りの鉄道ファン、特に汽車がお好きで、作品の中にも汽車の話がいくつも登場する。『阿房列車』を読み進めていると、まるで紀行文を読んでいる気にもなる。実際に阿房列車を先生も乗車されたようであるが、

あくまでもこれは小説である。

交通が移動手段であるため、時間短縮というのは人類における最大の課題であり、現在も地域間の時間短縮のためにあらゆる手段が開発され、実用化されている。鉄道でいえば、蒸気機関車から新幹線へと進化を遂げ、現在ではリニア新幹線の建設が始まろうとしている。一方で、かつては寝台列車を含めた夜行列車が全国の地域を結ぶネットワークを形成していた。現在は交通の発達で、基本的に新幹線や飛行機に「乗り換えれば」あっという間に目的地に到達することができる。しかし、別の視点から見れば、かつては駅から乗り換えせずに、時に寝ながら目的地とする駅に到達することはできた。佐世保や長崎から東京に行くことを考えても、そうであった。むしろ、時間は数倍かかったわけであるが。長距離列車がなくなると、ホームの「行き先」にはその文字が消える。レールは確かにつながっているのだけでも、まるでつながりがなくなってしまったような気もする。

同時に、時間短縮を達成した交通は、その旅情や感傷を喪失させたと思う。蒸気機関車が現役だった頃のさまざまな歌には、列車や汽車という言葉がいくつも出てきた。私はあまり文学に関心がないのでわからないが、恐らくは文学作品の中にも、さらには映画にも、列車や汽車というのが、別れの悲しさを引き出す小道具として出てきたのではなかったのではないだろうか。

いま、鉄道会社の間では、汽車や寝台列車がブームとなり、特に後者は九州を始め、全

国各地で走り始めた。しかし、かつての汽車や寝台列車とは異なり、ある意味目的地がない。それはなぜかというに、乗ること自体が目的となっているからである。百閒先生が今存命でいらしたならば、これらの列車に頼まれても乗車されたかどうかはわからない。

百閒先生の作品に『立腹帖』というものがある。文字通り、百閒先生のご立腹のことを書かれた作品である。やはり鉄道が出てくるので、それだけでも面白いのだが、先生がお怒りになったことを細かく書いてある。怒る、ということに色々な理由はあるけども、迷惑をかけられて怒る、ということもその一つにあるだろう。迷惑をかけるということは、他人に費用をかける、と経済学では考える。そこまで深く考えなくとも、やっぱり人を怒らせるのは良くないから、私は人に迷惑をかけるないように日常生活を送ることにしている。しかしながら、人が迷惑をかけてくる、ということには、時には立腹せざるを得ない。そういうときにも怒らないように気をつけるようにしている。そんなことを思いつつ、百閒先生に同情しながらこの作品を読んだ。

鉄道以外にも、百閒先生は小鳥がお好きだったようで、たくさんの種類の小鳥を飼っていらっしゃったようである。これらの趣味は私にも共通するものである。だから百閒先生の作品全集を買って（結果的に買い集めて）、本をあまり読まない私でも全部読んでしまった。

私も百閒先生のように、家のどこかに「日没閉門」の札をかけたいところである。

◆附属図書館HPアドレス <http://sun.ac.jp/center/lib/sasebo/>

- 当館は本学学生以外の方でも県内にお住まいの15歳以上の方は利用できます。
- 開館時間／平 日：午前8時30分～午後10時まで（学生の休業期間中は午前9時～午後5時まで）
土曜日：午前9時～午後5時まで
休館日：日曜日・祝祭日・開学記念日（6/4）

編集・発行責任／長崎県立大学佐世保校附属図書館運営委員会 発行日／2017年11月29日